
まるで神様みたいな

春川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まるで神様みたいな

【Nコード】

N6537T

【作者名】

春川

【あらすじ】

「この国を救って下さい」——そんな切実な願いのもと、異世界から召喚されたスカーレット。

性別は女。年齢秘密。職業、皇帝。

可愛げもなければ、優しくもなく、召喚した側の人間を馬鹿にしている。

そんな彼女のお話。（※お読みになる際は、ぜひ「はじめに」というページに目を通して下さい。面倒ですみません。）

はじめに

はじめに

・主人公は決して可愛いタイプではありません

・むしろ偉そうで嫌われやすいタイプです…

・奔放、自由、尊大といった言葉が当てはまる可能性大です

・自論を語りたがります

・ほぼ万能です

・ほんのり逆ハーレムです

そんな主人公が苦手、嫌い、意味わかんない、という方は、閲覧をお控えくださいますようお願い申し上げます。

主人公像を友人に語った際、ぼろくそに言われ、嫌いな人にはとことん嫌われるタイプの主人公なのかな、と思いましたので、このページを設けさせて頂きました。

不愉快に思われた方、おられましたら大変申し訳ありません。

また、

・なんちゃってファンタジー

・ご都合主義

・召喚した側の人間からは好かれない

予定です。（実際どうなるかはわかりません…）

これらにもどうぞご注意くださいませ。

そして、不定期更新（ゆっくり更新）だということにもご注意くださいませ。

沢山注意事項を設けてしまい、本当に申し訳ありません。

はじめに（後書き）

よろしくお願い致します。

人物メモ（前書き）

『7』を投稿した時点で、登場人物が割と増えていましたので、簡易ですが人物紹介のようなものをつくってみました。

こいつだれだっけ？　と思われた時などにどうぞ。

まだ『7』まで読んでいないという方は、ほんのりネタバレが含まれていますので、どうぞご注意ください。

人物メモ

――人物――

＊スカレット・ローゼリツチエ・ミルバンガンディヌス・サーリア
一応主人公

自分の世界での職業は女帝
赤色の長い巻き毛
全体的に偉そう

＊フォーレル・ギルヴェント

男

主人公と同じ世界の人間

職業は一応騎士

スカレットと似たような色の赤毛
大味なえろ人間

＊レレームド・シンドシン

男

主人公と同じ世界の人間

職業は政務官

ちよつと地味めで神経質？

＊シンフォア

女

主人公と同じ世界の人間
職業は女官
ロリペタでばっかい

*ランファ

女

主人公と同じ世界の人間

職業は魔法士

真面目っ子なオスカルさん

シ国民（キン大陸）

*セイ・コーマエ

シ国の神官長

*アユーム・ツヅキ

シ国の王女

*リョウ・ツヅキ

シ国の王子

登場人物がまた増えましたら、一応随時更新する予定です。

誰も、言葉が出なかった。

広々とした部屋は、薔薇の彫刻で彩られており、壁も天井もそれはそれは見事だった。

薔薇は、蔓も棘も花卉も大層な出来で、それはこの部屋のみならず、この宮全てに施された彫刻であった。

薔薇の宮と呼ばれるその理由にも頷けるほど、緻密で美しい。数十年前、芸術の申し子と謳われた偉大な彫刻家が、晩年に作り上げた大作である。

目を奪われることに、何の疑問も抱かない。そういう芸術作品。

しかし、床だけは趣が違った。

ほぼ一面に魔方陣が描かれているのである。

美しい薔薇にはそぐわない、書き散らされた文字文字文字……。

魔方陣を描いたものは、芸術家が今この場にいないことを泣いて喜ぶべきである。あるいは、彫刻家の墓までいって土下座して謝罪するべきだ。

少なくとも、この宮の彫刻にはそれだけの価値があった。

さて、そんな場違いな、空気を読まない魔方陣の中心には人がいた。

素っ裸の女性である。

ついさっきまで入浴中だったのだろう。全身は濡れているが肌はほんのりと色づいており、曝け出された全身と相まってとてもなく艶っぽく目が離せない。

豊満な胸元は、支えるものなど何もないというのにツンと上を向いているし、腰のきゅつとしたくびれは形の良い尻をさらに魅力的に見せている。

白い肌には、しみも黒子もないし、当然ムダ毛と呼ばれるような毛も存在しない。

絵画で描かれる、ヴィーナスのような女性であった。
いますぐ跪いてしまいそうなほど、神々しい。
その足元にある不釣り合いな魔方陣が憎くなるほどに。

「さて……、いつまで私は裸をさらせば良いのか聞かせてくれるか？」

堂々と、体を隠す気もなく話す女性は声すら美しい。

彫刻の薔薇と汚い魔方陣と素っ裸の美女。

謎の空間が出来上がっていた。

女性以外、誰も口を開くことが出来なかった。

「無視か」

女性は眉を跳ねあげた。

仕方のないことである。

1 (後書き)

だいたい一ページの長さは、これくらいの予定です。

「これは失礼。無視だなんて、そのような事は決して」

不機嫌そうに鼻を鳴らした素っ裸の美女に、一つ瞬きをして静々と近寄る男性。その服装は、ずるずるとしていて、袖も裾も実用性などなさそうなほど長い。

一応、と言わんばかりに軽く頭を下げたが、きっと内心も一応頭下げとくか、程度のものだろう。表情がそんな感じである。

「そ、そうですわ。決してそのような事は。あ、誰か服を持って来て頂戴、はやく！」

「とりあえずはこれを……」

実用性皆無な服装の男性に続くように、部屋の端に立っていた少女と男性が声を発する。

金髪巻き毛少女と、甲冑ガシャガシャ男性である。

甲冑男性が自分の体から剥ぎ取ったマントを女性に差し出す。とりあえず、これで身を隠せということだろう。

「受け取ろう」

素っ裸の女性は、男性が近づいても恥ずかしがる様子など一切見せず、それどころか堂々と腕を差し出し、マントを受け取った。

甲冑男性が軽く目をみはる。

身を小さくするなり、後ろを向くなり、なんなりするだろうと思
っていたからだ。

あまりにも人目に肌を晒すことになれている女性の様子に、驚き
を隠せない。

受け取った黒のマントを肩からはおった女性は、マントと背の間
に挟まった髪の毛を片手で、するりと持ちあげ、抜き出した。

首裏に手をまわし、髪の毛を外に抜き出す。

何気ない、それだけの行為なのに、ちらりと見えた白いうなじが
なんとも言えず、間近でそれを見ることになった甲冑男性は、のど
を鳴らさずにはいられなかった。

誘われているようにすら感じた。

だが、そんな甲冑男性を気にする様子もなく、女性は口を開く。

「それで、ここはどこだ？」

「ああ、そうでしたね。あまりにも衝撃が強すぎて本来真っ先に
言うべきことを忘れていました」

ずるずる服の男性が特に反省する様子もなく淡々と答える。

「ここはシ国といいます。キン大陸の端に位置する王国です。：
：貴女の知らない国だと思います」

「確かに聞いたことのない国だ」

「はい。といいますのも、我々が信仰する神の偉大な御力により
貴女は、世界を越えました。ここは貴女の暮らす世界ではなく、全
く異なる知らない世界、国です。ですが——どうかこの国を救っ

て下さい」

真摯な目で女性を見つめる男性。

今までとは大違いのその姿勢は、確かに救ってほしいという切実な気持ちを現しているように見えた。

だが、

女性はそうは思わなかったようである。

「なっていないな」

「は？」

「全然ダメだ。世界を越えました、知らない国です、でもこの国を救って下さい。ってなんだそれは。そんな言葉で納得して、はい救います、って言う奴がいるか？いたとしたらそれは大層な馬鹿か、自惚れ屋だけだ」

けんもほろろに、とはまさにこの事。

冷たい目で男性を睥睨する様は、その美貌と相まって恐ろしく迫力がある。

「な、貴女は神に選ばれたのですよ！ それを何と！」

「それは私の信仰する神ではない。よって私はそれを有難い事だとは思えない。ところで、貴様はこの国でどういった役職についている？」

「……ッ神官長ですよ」

「貴様らは？」

「王女よ」

「王子だ」

「ふむ……この国の要職についていると言えるな。しかもまだ若く、これから先それ以上の地位につく可能性も大いにあるだろう。それが、こんなに来損ないではこの国に先などないだろうよ。大人しく抗えぬ事象に呑みこまれて、滅びるが良い。それが運命なのだろう」

世界を越えた。つまり異なる世界にやって来た。

そういう異常事態に怯え慌てるわけでもなく、淡淡と話す彼女は、どこまでも冷静であった。

そして、豪華な深紅の髪を揺らし、マント一枚ですたすたと歩き出した彼女の視界には、あまりにも冷たく厳しい言葉に固まる三人など、もういない。

「礼儀のない神官長。一応部下にあたる神官長のフォローすらしない王女と王子。マント一枚はともかく、招いた人間を立たせたまま話しだすという適当さ。人の裸体をしげしげと見つめる王子。服をもってきて頂戴と言うだけの王女。そしてどいつもこいつも名乗りもしない」

歌うように、ひとり言をいう女性。

厳しいことを言っているようにも聞こえるが、正論といえば正論。

自分達が自分達の都合で、見ず知らずの人間を勝手に呼び寄せたにも関わらず、呼び寄せた人間が裸の女性だったというだけで、まともな対応も出来なくなるという柔軟性の無さは言うまでもなく。

そもそも大事な話をする気があるのなら、自国を救ってほしいと願ひ、呼び寄せた人間に対応するのだという意識を持ち、それなりの用意をするべきだろう。少なくとも椅子ぐらいは。

大切な相手に、お願い事をするというその意識が、用意が、彼らには見られない。

そして、マナーの欠片も感じさせない人間が要職につき、それらが接待にあたっているという事実。

彼女はそれを指摘している。

本当に国単位の話をする気があるのか、と。
そう思うがゆえに、彼女は言う。

「ダメダメだ」

ひと際大きな薔薇の彫刻が施された壁の前で立ち止まった彼女は、不意に片手を頭の高さまで上げて――、一拍後下ろした。

ドサッ！

「ふむ。問題ないようだな」

手の動きに沿うように、大きなクッションソファがどこからともなく落ちてきた。

それは大人五人が体を収められそうなほど大きい。そしてなにより、とてもふかふかしていそうだ。飛び込みたくなるほどに。

どこからともなく現れたそれに、我に返ったシ国の神官長、王女、王子。

「どこからそのようなものが！？」

「いつの間に！」

「どうやった！ 魔術か！？」

「魔術師を召喚していたのか！ それなら勝てる！」

「確實ね！ 魔術師ならあの化け物を倒せるに違いないわ！」

「それに無詠唱だ……相当力のある魔術師に違いない！」

……ついさっき言われた、きつつい正論も頭から飛んで行ったのか、非常に楽しそうである。

元気なのは良いことだし、騒ぐのも大いに結構だ。しかしそれは時と場合を考えるべきである。

特に、学習能力のない人間を嫌う彼女の前では。

「……虫の羽音が煩いな」

「虫ですって！？」

自ら出現させたクッションソファーに身を投げ出した女性は、美しい薔薇の彫刻を背後に従え、うっそりと微笑む。

「さて、私の名はスカーレット・ローゼリツチェ・ミルバンガン・デイヌス・サーリアという。虫ではないと言うのなら、名乗りに対し正しい言葉を返してみよ。私は虫と喋るほど暇な人間ではないのだ」

身を包むのはたった一枚の布。

宝飾品はおろか、ちゃんとした衣服すら纏っていない。

それでも、そんな彼女はこの場にいる誰よりも威風堂々としていた。

3 (後書き)

名前考えるの疲れた…。

「わ、たくしの名はアユウミ・ツツキ。この国の王女よ」

スカーレットに気圧されたように、苦しげに返答する王女。

些か声が震えているようだが、馬鹿にされているという苛立ちだけでスカーレットに立ち向かえる彼女は、中々のツワモノであるといえるだろう。

こういう時に、女という生き物が土壇場で胆力を発揮すると言われている事に納得する。

証拠に、圧倒されている神官長や王子——つまり男——は、アユウミの後に続くことが出来ないでいる。

「よからう。アユウミ殿とは話し合いが出来そうだ。いくつか質問に答えてくれるか？」

「よろしくてよ……」

緊張した面持ちで、スカーレットに向き合うアユウミ。

スカーレットは静かに足を組んだ。

骨ばっかりでただ細いだけのガリガリの足ではない。

きれいに肉のついた、噛みつきたくなくなるほど柔らかそうな足だ。つま先から綺麗に整えられたその足の奥が見たいと願わずにはいられないほどに、肉欲的な足である。

だというのに、彼女はそれを晒すことを惜しまない。気にしない。

「では、聞こう。この国の最高権力者はどこにいる？」

「王は、いま病で臥せっておられます」

「ふむ……私を召喚したのは、誰の意志だ？」

「王を除く、国の要職につく者たちの総意ですわ」

「では、これは国を挙げての召喚だと受け取って良いのか？」

「はい」

「ならば私の待遇は良いものだな？」

「え？ええ、そうですけど……？」

「よし。では私はこの建物を貰う。侍女はいらん。衛兵もいらん」

「はい？何を仰ってますの？」

一応外見は王女然としたアユウミの顔が間抜けなものになる。
サクサクと進むスカーレットの話に頭が追いついていないのだから。仕方のないことである。彼女は彼女のペースでしか物事を運ばない。

「しばらくここに滞在してやろうと言っているのだ。今の私は貴様らを救う気などさらさらないが、この滞在中に私の心を変えることが出来れば、貴様らを救ってやってもよいぞ？」

ふふん。

そんな声が聞こえてきそうな顔で笑うスカーレット。

一番偉いのは私だ。

そう言わんばかりの彼女の態度に、感情を爆発させるもの一名。
王が臥せているいま、全ての政治を暫定的に仕切っている王子である。

「貴様アツ！ 我々を侮辱するのも大概にしろ！ さっきから聞いていれば偉そうに、一体何様のつもりだ！！」

咆哮すると同時に、腰に下げていた剣を抜き放ち、スカーレットに斬りかかる！

王子の持つ剣は大きな宝石が沢山ついていたが、ただのお飾りなどではなく、刃の鋭い実用性のありそうな、列記とした武器だった。

誰もがスカーレットの死を、あるいは重傷を思い浮かべた。

神官長は唇に嫌な笑みを浮かべていたし、王女も仕方ないな、といった表情をしていた。

なぜなら王子は、素晴らしい剣の使い手だともっぱらの評判だったからだ。

王子が斬りそこなう可能性など万に一つもない。馬鹿な女が死んだ。そう、特に感慨も抱かずに思った。

——スカーレット以外は。

スカーレットは決して危ない橋を渡らない人間だ。計算高いと言ってもいい。

自身の優位が揺るがないものだとかわかっていなければ、そのような高圧的な態度はとらない。

だから、この結果も当然のものであるといえる。

シ国の人間たちの想像を完全に裏切る結果だったが、彼女に言わせれば当然の帰結であった。

私の方が強い。そう、自らの優位を確信していた彼女に言わせれば。

4 (後書き)

上から目線な女主人公を書きたくではじめた、このお話ですが、正直上から目線って難しいです…。

自分がスカーレットを好きになれな（ry
いや、好きです。頑張ろう。

ギッ！

「些細な挑発に容易くのつてくるとは……さすがは馬鹿」

「なっ!？」

何時の間にかスカーレットの手に握られていた不思議な形状の剣。それが王子の剣を防ぎ、ぎりぎりど罅迫り合いを起こしている。

そう。

シ国で素晴らしい剣の使い手だと称される王子の剣戟は、容易く女の手によって止められたのだ。

スカーレットは、曲線と直線を合わせた不思議な刃の向こう側から、王子に艶然と微笑んだ。

「私が何様かだと？ミルバンガンディヌス帝国およびサーリア帝国皇帝、スカーレット・ローゼリツチェ・ミルバンガンディヌス・サーリアだ！」

「皇帝、だと…？それをどうやって証明する！ この、異世界人がっ！」

受け止められた自分の剣を、信じがたいものをみるような目で見た後、王子は再度スカーレットに斬りかかった。

王子という自らの地位を貴いものだと思っている彼には、皇帝を名乗るスカーレットがとんでもない無礼者に思えたのだ。

一度頭に上った血はなかなか落ち着かないもの。

けれど。

ギ、ギ、ギと何度打ち込んでも、受け止められる己の剣に王子の血の気はだんだんと引いていく。

「う、うおおおおおおお！！！！」

そして、自棄になったかのように、力任せに突っ込む。

キン————ッ！

ガラランガララン……。

「ふん……。頭も悪く、腕も悪いというわけか。使えん男だ」

王子の剣を壁際まで弾き飛ばしたスカーレットは、追い打ちをかけるように言葉を吐き出す。

「良く見てみよ。私は片手でマントを押さえたままだぞ？ 貴様はその私に負けたのだ。王子だと言うのなら、この敗北を恥じるがいい。人の上に立つ者が弱者な馬鹿であって良いはずがない。民は懦弱な王など望んでおらん！」

スカーレット・ローゼリツチェ・ミルバンガンディヌス・サーリア。
ア。

十八の時に母国サーリア帝国の皇帝の座につき、その後彼女を女と舐めてかかってきた大国ミルバンガンディヌスを返り討ちにし、遠い親戚の血を利用してその国でも皇帝の座につき、以後広大な土

地を治める女帝として大陸に君臨。

彼女は、彼女のやり方でその自分の地位を築き上げてきた。

初めは自分と相手、どちらが上なのかを推しはかる。

自分の方が劣っていればにこやかに接し、蹴落とす手段を念入りに考える。時間は惜しまない。

逆に自分が優れていれば毅然とした態度で対応する。そして相手がこちらに恭順の意を表す賢い者ならば重用するが、優劣の判断が出来ない者や、言ってもわからぬ馬鹿には実力行使に出るのである。言って分からぬ馬鹿には、体でわからせる。それが彼女の道理だからだ。

そして、今回もそれが適用されただけの話。

何一つ驚くことではない。

優劣の差もわからない馬鹿な王子が、スカーレットの容易な挑発にのり、馬鹿さ加減をさらに露呈し、あぐく自分の得意分野で負け、優劣を見せ付けられた。ただそれだけの事。

「ふう……。話が逸れたな？二国を治める私は大変忙しい身なのだ。そんな私だが、貴様らのあまりの馬鹿さ加減に憐れみを催したので、しばし滞在してやろうというわけだ。その間に貴様らが人並みに賢くなったなら、救ってやらんこともないぞ？精々頑張って私の気持ちを変えて見せよ。私はただの馬鹿は嫌いだが、努力する馬鹿は嫌いではないのだ」

ポイッと剣を投げ捨てて、クッションソファーに身を沈めるスカーレット。もう言いたいことは言った。そんな風情である。

口紅も塗っていないのに、赤く輝く唇が開き、ふああと欠伸が一つ零れる。

無防備に伸びをするその姿は、今度こそ本当に、誰も目に入っていない様子だった。

5 (後書き)

上手い言いまわしが思いつかず悶々としています…。
あと、長ったらしい国名を打つのが面倒です↑

6／10 誤字訂正

「あの女断じて許さん!!」

カツカツカツカツ

早歩きで城内を移動する神官長、セイ・コーマエ。
その顔はかなり険しい。

神の力による救世主召喚より早一週間。
好き勝手に振る舞う我儘なスカーレットに彼の怒りは常に爆発状態だ。

満月の夜になるとやってくる怪物を倒してほしい。それが願いのだが、それを伝える暇もなく、彼女の前に姿を現わせば馬鹿にされるばかりの日々。

王子も王女も同様に、馬鹿扱いされ、セイとアユウミと王子——リヨウ・ツヅキ——が顔を合わせれば出てくるのはスカーレットをネタにした愚痴と罵詈雑言。

「忌々しいっ！ 大人しく我らに力を貸せば良いものを、皇帝だが高んだか知らんが高飛車な物言いをしておって……っ！ 可愛げのない女よ！」

昨日はどこで知ったのか、仕事での失敗を『なんでそのような馬鹿げたミスを犯したのか、わかっているのか？』などと突つかれるし、その前の日はこれまたどこで知ったのやら『貴様は本当に神官

長か？神官たちからの信用がないようだが？長としての威厳もないのだな』などと笑われるし、その前もその前も、馬鹿にされ続けるありさま！

そして、ついには夢にまで出てきて馬鹿にされる始末。

セイは、理不尽でもなんでもいいからとにかく一発、スカーレットを殴りたくて仕方なかった。

薔薇の宮が視界に入ると、その歩調はさらに早くなる。気がせいっているのだろう。

ずるずるとした神官服は、翻り、捲れ、冷静沈着と言われたセイの印象を百八十度変えることになりそうだ。

しかし、今彼の頭を占めるのは怒りのみ。

セイの耳にキャーという女の楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

我が国の女官を誑かし、侍らせているのか……っ！と意外と想像力豊かなセイは思った。

「いい加減にして頂きたいっ！」

ノックも、名乗りもなしに、ドアをバーンを押しあけるセイ。

「へ？」

彼は我が目を疑った。

「私は白昼夢でも見ているのか……！」

「ハハハ。どうするどうする。神官長に見つかってしまったぞ？」

「ハハハ。我が愛しの女帝……隠すつもりのない貴女も同罪では？」

「ハハハ。面白いことを言うじゃないか我が第一騎士フォーレル・ギルヴェントよ」

スカレットに良く似た赤毛の男が、跪きスカレットの手の甲に唇を押し当てている。

しかも男はもう片方の手でスカレットの足を撫でまわしている。こんな朝から、破廉恥な男をセイは知らない。

ん？とお互いに、厭らしく笑いあう二人に、うつとりとした目を向けている女性二名。

黒髪の幼い娘と、銀髪の男らしい女だ。どちらも見覚えのない顔である。

「女帝！ ただいま戻りました」

「っぐ！」

誰だこいつらは……と、ふらりと眩暈を起こしていたセイの背に、勢いよく開いたドアが食い込む。

痛みに悶えながら後ろを振り返ると金髪の少し地味目な男が。こちらも見覚えのない顔だ。

「~~~~っ貴様らは誰だー！！！！」

誰だー、だれだー、だれだー……。
叫び声がエコーした。
女帝がクスリと笑った。

7 (前書き)

軽い百合表現有り。ご注意ください。

「それで、どういうことですか」

米神をびくびくさせたセイがスカーレットに問う。
セイは些か、冷静さを取り戻したようだった。

「ふむ……簡単にいうと私の部下たちだ」

「女帝付き第一騎士フォーレル・ギルヴェントだ。どうぞよろしく？」

ぱちりとウインクなんてしてみせる、騎士には見えない整った容貌の赤毛の男。

その雰囲気はガキ大将をそのまま大きくしたような、茶目つけのあるものだ。

「女帝付き政務官のレレームド・シンドシンです。」

金髪碧眼と美形要素を取りそろえているにもかかわらず、どこか地味めな男だ。

神経質そうに、じろじろとセイを見まわしている。

「女帝付き第一魔法士、ランファだ。よろしくしてくれなくて良い」

キリリとした美男子のような、銀髪の女が言う。

膨らんだ胸以外で、一切女らしさを感じさせない男らしい女。

「女帝付き女官のシンフォアです。セイちゃんって割とイケメンだけど女帝様には完璧に負けてるね！」

黒髪で凹凸の少ない体の少女が、馬鹿っぽくそう言う。

馬鹿っぽいというよりは能天気なのかもしれない。いや、何も考えていないのかもしれない。

「って、名乗られたからって納得するわけないでしょうが!!」

机を思い切り叩き、立ち上がるセイ。

落ち着きなんて宇宙のかなた。

「なんで異世界人がこんなに増えてるんですか！　おかしいじゃないですか!!」

「おかしいのは貴様だ神官長。名乗られたのだから、名乗り返したらどうだ？　貴様はアユウミ殿よりも劣っているな」

「うるさいですよ！　わけのわからない奴らに名乗れるもんですか！」

「だからそういうところがダメだと言っているんだ」

やれやれ、と言わんばかりに首を振るスカーレット。

「貴様は誰が相手だったらちゃんと挨拶をするんだ？　貴様はまだ私に対しても名乗っておらんぞ？　貴様より偉い、この私にだ」

二国を治める皇帝と、一国の神官長。
どちらが上位かなど、子供でもわかる話である。

「その何の役にも立たないプライドをさっさと捨てることだ。も
っと大事なことがあるだろうに」

「っ、帰ります」

セイは、特に反論をするわけでもなく退室した。

彼ももう二十代後半。自分が直すべき点ぐらいいは気付いているの
だろう。

ただ、これまでに形成された性格が、簡単に直らないだけで。

しかし、スカーレットはそう簡単にセイを思いやったりはしない。
セイがただの町民であつたなら、仕方ないなと優しい目でみたか
もしれないが、彼は仮にも人の上にたつ存在。

神官長という、神官たちを統べる立場にあるのだ。

そういう人間がいつまでもただの子供のように振る舞うのを、ス
カーレットは認めない。

「帰っちゃいましたよー？」

「ああ、仕方ないさ。奴はプライドは高くせに意気地はないと
いう、ダメダメ人間だからな」

シンフォアがクッションソファに座るスカーレットの足元に座
り込む。

「じゃーなんで、助言してあげるんですかー？女帝様が助言して
あげるほどの人間じゃないと思いますー」

ぷくうと頬を膨らませるシンフォアは、凹凸のない肉体と相まって幼い子供のようなだが、これでもセイと数歳しか変わらない。合法ロリとは彼女のことである。

「ハハハ。何を妬いているのだ？ ん？」

スカーレットが屈んで、シンフォアの顎をすくい上げる。

「だってー」

「お前は本当に可愛いな？ シンフォア」

シンフォアの唇の横に、ちゅ、と軽いキスを落としたスカーレットは笑う。

「ただの——××××さ」

「えー、俺にもキスして欲しいなあ。シンフォアだけなんてズルイ」

フォーレルが人差し指でつつー……とスカーレットの唇を撫でる。その手つきは色めいていて、情事の始まりすら匂わせた。

色事に慣れきっていることを示すかのような、フォーレルの甘い声と表情はしかし、スカーレットには効いていない。

逆に彼女は、男を落とすための悪い顔で微笑みかけた。

「何を言っている。昨晚、閨でやっただろう？」

唇にあてられたフォーレルの人差し指を、甘噛みして、舐める。

「まだ、欲しいのか？」

「……貴女に囚われた哀れな男に、救いの手を差し伸べてはくれないのですか？ 女帝サマ？」

スカーレットの口内に這入り込んだ人差し指で、彼女の上あごを擦り、にやにや笑顔で顔を近づけるフォーレル。

「ふふ……お前のそういう所が好きだよ。良いだろう。今晚も私を楽しませてくれ」

そう笑ったスカーレットに肩を落とすもの三名。

ガッツポーズをするもの一名。

「うううゝ途中までは私が上手い事いつてたのに！ フォーレル様の馬鹿あゝ！」

「くっ！ 私はいつになったら順番がまわってくるのだ！」

「貴方より私の方が切実ですよ……ほとんど一緒に居れないのに夜も別々なんて……！ フォーレル許すまじ……っ」

「はっはっはあゝ！ 俺の一人勝ちだぜ！」

語尾に星マークでもつきそうな口調でいつてのけるフォーレルは、閨に侍る事を許されなかった三人の恨めしそうな視線を気にも留めない。

細かいことはあまり気にしない。それがフォーレル。大味な性格をしている。

「だってー、俺の悲しみはまだまだ癒えないんだもーん」

「だもーんとか言うな気持ち悪い」

「ランファちゃん冷たい」

「まあ、でも実際フォーレルの絶望は大きかったですよ。だってこいつ、目の前で女帝様に消えられたんですから」

「ああ……そういえばそうだったな。お前と風呂に入っていた時に、私が召喚されたんだった」

思い出した。という表情をするスカーレット。

そう、スカーレットが召喚されたあの日、あの時。

フォーレルは勝ち取った『ご一緒にお風呂』の権利を使い、楽しく過ごしていたのだ。

それがどうだ。楽しかったのは途中までで、行き成り姿が霞みはじめたスカーレットを前に、動揺していたら数秒後にはもう彼女の姿は、影も形もなかった。

フォーレルは多大な衝撃をうけた。

女帝付き第一騎士の自分が一緒にいながら、スカーレットただ一人を連れて行かれたという事実。女帝付き、なのに一緒に行けなかった事、騎士なのに守れなかったこと、諸々が彼を苦しめた。

そして何より、自分の目の前でスカーレットを失ったという絶望。

フルチンで浴場を飛び出し、レレームドたちを招集したのは言うまでもない。

「グスン。本当にショックだったんですよ。だって女帝サマなら絶対俺を連れて行くことも不可能じゃなかったはずなのに、俺をあっさり捨てて行った」

「拗ねるな。ちゃんと拾ってやっただろう？ 一番に」

わざとらしく拗ねて見せるフォーレル。

三十路前の男がやっても可愛くもなんともないが、彼の性格のおかげでまあなんとか愛嬌はある。

……それが良いのか悪いのかは、判断のし辛い所だが。

8 (後書き)

バレバレかもしれませんが、私はフォーレル最良です…っ！↑

「それに、一番寂しがっているのは間違いなくアチラにいるパークスなのだから」

「ああ、パークス。確かに。彼は国外で諜報活動中でしたし、そう簡単に呼び出すわけにもいかないですからね。事後処理とかありますし」

「女帝付きなのに、あちこちふらふらしてるアイツが悪い」

スカーレットの言葉に、レレームドとランファが素早く反応する。

今の話のネタは、パークス・ヒドミツク。

スカーレットたちの世界の人間で、女帝付き第二騎士として女帝に仕える身ものだ。

もつとも、フォーレルと同様に騎士らしくない騎士で、ランファの言葉通り大陸中をふらふらと動きまわり、勝手に諜報活動をしてお土産として情報を持ちかえるという自由な男である。

しかし女帝スカーレットへの愛・忠誠は他の者と同様に溢れんばかりに抱いており、今ごろは放っておかれたわが身を嘆いていることだろう。

「ハハ、でもあっちにはジルミーレ爺さんも残ってるし、滅茶苦茶拗ねるってことは無いんじゃないの？」

「さあて……どうだかな。ジルミーレには全権を一次的に預けるために手紙を認めたが、パークスには何も連絡していないしな」

ニイ、つと悪そうな顔で微笑むスカーレット。
その顔はキュンキュンと泣く子犬をみて、喜んでしまうダメ飼い主のようだ。

「パークス様可哀相」

シンフォアが全くそう思っていないさそうな顔で言う。
しかし、それも仕方のないことである。

ドMなパークスへの、女帝の意地悪はご褒美のようなものです
らあったからだ。

普段は軽薄極まりないパークスは、その実一旦女帝の目に待ると
虐められて喜ぶ変態に成り下がる。

どうせ今も『寂しい、悔しい、でも今俺虐められてる……！』な
んて一人でやっているだろう、と容易に想像できるほどには、彼の
変態さは仲間内では有名だった。

パークスという男は、拷問のスペシャリストでもあるのに、ドM
でもあるというとんだ変態野郎なのである。

「さて……、楽しいお喋りは終わりだ。実りある、これからの話
をしようじゃないか。さあ、レレームド始めよう」

マイペース女帝スカーレット。

彼女の一言によって場の空気は一瞬で変わる。

「はい。それではこれより、女帝陛下へのご報告を始めます」

ス……と頭を下げたレレームドに習うように、ランファも頭を下
げ、フォーレルは片膝をつき、シンフォアは両膝をついた。

女帝の顔になったスカーレットと、部下の顔になった四人。
公私が完全に切り替わったのだ。

数瞬後、スカーレットが手を打つ軽い音が響き、四人は元の体勢に戻り、スカーレットが母国から呼び寄せた円卓に坐した。

「それではまず、この国の現状から――」

どこから出したのか、レレームドの手には数枚の書類が握られている。

そして彼はそれを読みあげる。

「この国は今現在マクロという怪物の被害にあっています。満月の夜に現れる、通常の武器の効かない生物だそうです」

「デカイのか？」

フォーレルが口を挟む。

「女帝陛下に差し上げている報告です。女帝陛下以外の者は、質問をする際に挙手をして下さい」

序盤で話を遮られたレレームドは不愉快そうに細めた目で、フォーレルに視線をやった。

「前も言われてなかったか？」

「言われてましたあ」

レレームドの機嫌を慮って、小さな声でランファとシンフォアが言葉をかわす。

そして、何度言われても学習しないフォーレルが悪い、とほぼ同時に嘆息した。

「……ハイ」

フォーレルが気まずそうに静かに片手を上げた。

「はい、フォーレル」

「大きい？」

まるで子供が母親に教えを請うような、幼げな問い。

しかしフォーレルの顔は、いまにも舌舐めずりを始めそうな獣のそれだ。

彼の本分は戦うこと。

刃を交え、命ある限り敵に食らいつくことこそがフォーレルの至上の喜び。

戦いに重きをおくフォーレルにとって、敵を知る事はその喜びに近づく事なのである。

当然のように気が高ぶる。

「ええ、大きいです。話によりますと、この国の王城とほぼ同じくらいの大きさだそうです」

「へえ……」

「では、続けます」

うずうずしてきた様子のフォーレルをさらりと無視して、レレームドは手元の書類に目を落とす。

「満月の夜に現れる理由、通常武器のきかない理由、共に不明ですが、それはこの国が何の調査も行っていないからで、調べれば何らかの理由が推し測れそうです」

「ふむ……続ける」

「はい。今のところ死者は千人前後。海側の町から段々と王都に向かってきているようで、それまでにあった町のうち四つが焼け野原という壊滅状態、三つと連絡が取れず、二つがかろうじて町の再建が可能な状態です。その二つの町が、この王都と同じ規模でこのままでは王都も危ないという状況です」

「質問」

フォーレルと違い、きちんと挙手をするランファ。

「どうぞ」

「満月の周期は我々の世界と同じか？」

「そうですね。およそ三十日だそうです」

「ならば九カ月もこの国は、マクロから攻撃をうけているというわけか？」

「いえ、それは違います。一夜で一つの町を攻撃しているのではなく、二つ三つほどを一夜で攻撃しているのです。被害を受け始め

たのは四カ月前で、初めに二つの町が攻撃をうけ、二回目に三つ、三回目に二つ、四回目に二つ、というわけです」

「そうか。ありがとう」

「いえ。他にありますか？」

「はい、私も質問いいですかー？」

「……どうぞ」

シンフォアが挙手をし、レレームドの顔を伺う。

実は彼女、少々お馬鹿でよくレレームドに馬鹿な質問はするな、と怒られているのだ。

だからだろうか。今回は怒られないといいな……。そんな表情をしている。

対してレレームドは、満面の笑顔である。

さあ、言ってみろ。そんな声が聞こえてきそうだ。

「えーと、九つも町が攻撃を受けているのに、死者が千人前後ってことは、生き残った人が結構いるって事です、よねー？ その人たちはどこにいるんですか？」

「そうですね……。千人前後の死者というのは、正確には六つの町での大体の統計です。三つの町とは連絡が取れない状態だ、と言いましたよね。そういうことですから、かなり多くの人々が亡くなっていることになります。確認出来る範囲では、数少ない生存者たちは王都に身を寄せているそうです」

「その生存者たちへの国からの援助はどうなっている」

スカーレットが横から口を挟む。

しかし、当然レームドは何も文句を言わない。

これは女帝である彼女への報告だからだ。

「特に何も行っていません。強いて言うなら王都での検問をスルー同然で通れたことぐらいでしょうか。衣食住何一つ援助・支援されていません」

「クズだな、この国は」

スカーレットが吐き捨てるように言った。

10 (後書き)

なめくじのような投稿スピードで申し訳ありません。
完全な夏バテです…。とろけそう。

カツカツと円卓を叩くスカーレットの爪音が響く。

「レレームド。この国の地位ばかり高い馬鹿どもの報告をしろ」

「はい。ではまず王子のリョウ・ツヅキから」

ぱらり。

スカーレットの指示に従い、レレームドは用意していた書類を捲る。

「端的に申し上げますと、父王が臥せっているのを良い事に、暴君のように振る舞う俺様王子です」

「典型的な馬鹿王子だな…」

「その通りでございます。では、いくつか王子の暴挙をご報告いたします。一つ目、顔が気に入らないからと言って後宮に迎え入れていた同盟国の姫を国外追放。現在その同盟国からは異議申し立てが来ております。二つ目、趣が気に入らないからと言って建国以来大事に手入れされていた初代国王の離宮を取り壊し。現在、建国の父である初代国王を蔑ろにしたとして市民の間では王子に対する信頼が低下中。三つ目、マクロ被害にあった生存者たちを支援するという議会で持ちあがった案を軍備増強が先だ、と一言で切り捨てました。現在王宮内でこの話が広まっており、王宮勤めの者たちは王子に疑心を抱いております」

レレームドの王子の馬鹿話はそれからさらに五分ほど続いた。そして、話が終わるころには、スカーレットの眉間に小山が出来てしまっていた。

フォーレルが「スマイルスマイル」と小声でアピールしているが、果たして聞こえているのか。

「もう王子の話は十分だ。レレームド次に行こう」

「はい。それでは次は神官セイ・コマエの報告を――」

レレームドの話はとても長かった。

どれくらい長かったかというと、初めはマクロの大きさを聞いてワクワクしていたフォーレルが居眠りを初めて、ごうごうと鼾をかいてしまうくらいに長かった。ちなみにフォーレルはその後、レレームドに叩き起こされていた。まあ、当然のことである。レレームドは頑張っているのだから。

「よしわかった。よくわかった」

眉間を指先で揉みながら、難しい表情をつくったスカーレットが言う。

「どうやら彼女はもう、うんざりしているようだった。」

それもそのはず。

王子、神官長に続き、王女、將軍、王妃、王……とレレームドの口は休むという概念を知らないかのように動き続け、結果二十を超える人間の報告を行ったのである。

そしてスカーレットらの脳裏に刻み込まれたのは、いかにこの国の上層部の人間が愚かであるのかということだった。

家族を友人を愛する人を町を家を奪われ傷つきながらも生き残った民に、何の援助も行わず、愚策を弄するばかりの馬鹿ども。

民を治めるという意味で同じ役職に就く人間として、この国の人間の凡愚っぷりがスカーレットには理解できなかった。

「暇つぶしにするには些か面倒になってきたな」

溜め息をかくしもせず、そう呟いたスカーレットはレレームドに劳いの言葉をかけ、思案するように目を閉じた。

「しかし、だ。マクロは興味深い。とりあえずレレームド、お前にマクロの調査を命ずる。詳細な報告書を提出しろ」

「は。謹んで承ります。して、期限はいかほどでしょうか」

「そうだな。別に急ぐ必要もない。私を満足させられる、と思った時点で調査を切り上げろ。何人必要だ？」

「では、五人ほどお貸し願えますか？」

「うん。励めよ」

トトン。

スカーレットの爪が円卓を軽く叩いた。

すると、どうしたことか。部屋の端の方から、いや、正しくは部屋の端の影の中から、人型の靄が五体生まれ、歩き出したのである。

「レレームドに従え」

命令はそれだけで十分であった。

靄はレレームドの背後に周り、母国で彼に付き従う部下のように振る舞い始めた。

「有難くお借りいたします。それではさっそく御前を失礼いたします。何かございましたらお呼び下さい。それと、先ほどの書類はこちらに」

そつなく、テキパキと礼をとり、椅子から滑るように下りたレレームドは、書類をフォーレルに無理矢理持たせ退室していった。

「……」

ユラリユラリと体を揺らしながら、靄たちも出て行った。物にぶつからないか、心配になる程度には、独特な歩き方であった。

11 (後書き)

のたのた更新ですみません…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6537t/>

まるで神様みたいな

2011年9月17日05時45分発行